一瞬の人生

「仕掛けと謎」の楽しみ

短篇ミステリー・コレクション

一瞬の人生

「仕掛けと謎」の楽しみ

短篇ミステリー・コレクション
一瞬の人生——「仕掛けと謎」の楽しみ
一九九一年四月二十二日　第一刷発行

編　　者——関口苑生
　　香山二三郎
発行者——野間佐和子
発行所——株式会社講談社
　　東京都文京区音羽二—一二—二一
郵便番号——一一二—〇一
電　　話——編集部　〇三—五三九五—三五〇五
　　販売部　〇三—五三九五—三六二二
　　製作部　〇三—五三九五—三六一五
印刷所——豊国印刷株式会社
製本所——株式会社黒岩大光堂
定　　価——一八〇〇円（本体一七四八円）

落丁本・乱丁本は、小社書籍製作部宛にお送りください。送料小社負担にてお取り替えいたします。なお、この本についてのお問い合わせは、文芸図書第二出版部あてにお願いいたします。
© Sonoo Sekiguchi, Fumirou Kayama
1991 Printed in Japan

ISBN4-06-205305-5　（文2）

目次

罪に憑かれる　川口松太郎　7
飼育の楽しみ　曾野綾子　33
女の檻　結城昌治　51
泥棒猫　梶山季之　69
老人連盟　仁木悦子　89
加えて、消した　土屋隆夫　109
風が死んだ山　新田次郎　129
砂の時計　鮎川哲也　159

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

情熱の断罪　森村誠一　185
焼きつくす　佐野　洋　217
黒い葬列　日下圭介　247
水底の祭り　皆川博子　277
水子地蔵の樹影　夏樹静子　309
年賀状・誤配　笹沢左保　341
幸福な人生　赤川次郎　371
靴の行方　阿刀田高　385

ベイ・シティに死す　連城三紀彦　399
本格的にミステリー　小泉喜美子　425
魂魄記　日影丈吉　447
糸ノコとジグザグ　島田荘司　469
編者解説　関口苑生　香山二三郎　501

一瞬の人生

「仕掛けと謎」の楽しみ

短篇ミステリー・コレクション

装幀／亀海昌次

罪に憑かれる

川口松太郎

川口松太郎　かわぐち・まつたろう

明治三十二年東京生まれ。警察署給仕、中央電信局勤務などを経て、昭和九年「オール讀物」に芸道もの「鶴八鶴次郎」を発表、菊池寛に激賞される。昭和十年「鶴八鶴次郎」「風流深川唄」などで第一回直木賞を受賞。四十四年「しぐれ茶屋おりく」で吉川英治文学賞受賞。四十八年文化功労者となる。「新吾十番勝負」「夜の蝶」「人情馬鹿物語」など時代小説、現代小説の作品多数。六十年没。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

一

その前日にも父娘喧嘩があった。この頃は三日にあげず喧嘩する。どっちにつく事も出来ないのでなるたけ口出しをしないように、今日もこっそり出て行こうとすると

「鉄郎！」

と、呼ばれてしまった。知らん顔をする訳にも行かないので、しぶしぶ衝立の前に立つと

「其処へ座っててくれ。俺のいう事が無理か無理でねえか、聞いててくれ」

と、社長はいう。そういわれるのが、何より苦手なのだ。社長のいう事も無理ではないが何といっても時代おくれだ。

「鉄郎は毎日俺たちの喧嘩を聞いているんだが、寿子が正しくて俺が無理か。構わねえから正直にいってくれ。無理なら無理でいいんだ。俺も考えなくちゃならねえから公平な事をいってくれ」

「無理とは思いません」

と、仕方なくいった。そういうより他はないので

「でも然し、寿ちゃんの希望も判ります」

と、少しだけ寿子の味方をすると、案の定、顔がけわしくなって

「手前はどっちの味方するんだ。寿子が間違ってねえというのか」

「寿ちゃんは男に惚れたんですよ。惚れるって事に理屈はありませんからね。社長は相手が気に入らないから怒ってるけど、寿ちゃんにとっては大事な男なんだ。この喰い違いは仕方がありませんや」

と、思いきっていった。いいかげんなお座なりをいうのが厭になって、娘の方へも

「あんただって反抗するばかりじゃいけませんよ。親の嫌いな相手と一緒になりたいんだからお父さんの機嫌をそこねないようにうまく話し合わなければ」

「もうそんなお座なりは止しとくれよ」

「お座なりじゃありませんよ」

「お座なりだよ。そんな所はもうとっくに通り越しちゃったんだから」

と、娘の方もいいかげんしびれを切らせている。小松原と寿子の関係も一年近くなり、抜きさしのならない間柄になっているのに、父はどうしても承知をしない。相手が役者だという事が何よりも気に入らないので

「昔の俺ならば諦めもするが、今では正業についてるんだから、まともな亭主を持って当り前な生活をして貰いたいんだ。役者や芸人でなく、安月給の勤め人でもいいから地道な人間と結婚して貰いたいんだ」

下村のその愚痴も今に始まる事ではなく

「一歩譲って役者でも諦めるにしたって、小松原みたいな素性のよくない相手をなぜ選ぶ。よりによってあんな奴を選んで、この上にも俺を怒らせなくたっていいじゃないか」

そのいい分にも一理はある。寿子の惚れている小松原は、安藤京子という女優の亭主で、浅草では知らぬ者もない札つきの男、安藤と別れて結婚するというのだが、京子は六区の女剣劇で年下の小松原と二年も一緒にいた。そんな前科者だけに承知しないのも無理ではないのだ。

「何とかいえ。返事をしろ」

と、下村が怒って怒鳴りつけるのを

「止して下さいよ。そうのべつに喧嘩されたんじゃ私だって困ってしまう。寿ちゃんも二階へ上っていらっしゃい。今日は一日外へ出ないで」

「お父っさんの判らず屋にも呆れる」

と、寿子は二階へ上ってしまった。ちょうど其処へ本社のセールスマンが入って来たので話の腰が折れて仕方なく商談に入った。

下村商会は資本金一千万円の会社で映画常設館を五つ持ち、三十人の社員と二十人の臨時雇いを使って一ヵ月に五百万内外の商売をしている。

終戦直後の混乱の中で本所周辺に五軒の映画館を手に入れやくざの足を洗って仕事を始め、下町の二流興行師で確実に利益をあげ、小金も相当に残している。女房はとっくに死に、若い妾をひとり置いて結婚せず、娘の寿子に聟を取って仕事を譲り、好きな競馬に打ち込んでのん気に晩年をすごしたい念願だけに、聟に対する希望だけは強かったのだ。

鉄郎は、彼がまだやくざ時代からの腰巾着で、親分と一緒に足を洗い、下村商会の取締役営業部長という一人前の肩書になっている。

「何とかならないかな」

と、セールスマンが帰ったあと

「小松原なんて奴を聟に持つかと思うとそれだけでもう

んざりするんだよ。ああいうつき合いからすっかり離れてしまいたいと思う俺の気持が判らないのかな」
「そりゃアよく判ってるんですが、寿坊があすこまで惚れてたんじゃどうしようもないじゃありませんか」
「何だってあんな奴に惚れたんだろう」
「寿坊が惚れたのか、小松原が騙したのか、そこんとこは判りませんがね」
「俺は騙されてると思う。相手は海千山千なんだから」
「何といったって寿坊は苦労知らずですからね。自分から思い込んじまって、抜きさしがならなくなったんでしょう」
「もう関係が出来てるかな」
「あそこまで決心してるところを見ると出来てると見なきゃなりませんね」
「そうかな」
と、眉を寄せて口惜しそうにしたあと
「お前も間抜けだぞ」
「何がです。私に関係ないじゃありませんか」
「そうはいわせねえ。お前は何年俺にくっついてるんだ。かれこれ十年になるじゃないか」
「そうですよ。足かけ十一年、まる十年です」
「毎日一緒にいやがって何だって寿子を放っといたんだ」
「……？」
「間抜けだよお前は」
「そういったって私しゃ疵もんですよ」
「同じ疵もんならお前の方がよっぽどいいや。あんなバラ公みたいなもん、女剣劇の亭主になりやがって躰全体が汚れてるじゃねえか。そこへいきゃお前は気心も判っていて、一緒に苦労もして来たんだから、どんなにいいか判らねえのに」
「そういわれたって困りますよ社長」
と、鉄郎は泣きそうな顔をした。
自分から疵ものだといったのは女房みたいな女が二人も三人もいたし、今でこそ一人でしょんぼりしているが、その昔は女出入りの絶えなかった身だ。寿子の亭主になる資格なぞないものと諦めていたが、下村にそういわれると未練は出る。
「俺でも資格があったのかな」
小松原みたいな三流役者よりはいいかも知れない。しかも昔から寿子に惚れているのだし、惚れたところで夫婦になれる相手ではないと思っていたのが
「間抜けめ！」
と、叱られてしまった。資格があったとすれば全く間

抜けだ。望んでも遂げられないと諦めて何もいわなかったのだが
「オヤジはそんな気でいてくれたのかな」
と、後悔してしまった。そして社長が出て行くと寿子の部屋へ上って見た。
館のうしろに事務所兼用の自宅があって、二階は殆ど寿子の部屋になっている。下村は猿江に別宅を持ち女房とも妾ともつかぬ若い女を置き、本宅と事務所の経理は寿子に任してある。
「入ってもいい？」
と、ドアを細めに開けていうと
「お父っさんの使いなら厭だよ。もう聞き飽きたんだから」
と、突っ放すようないい方だ。返事もせずに部屋へ入ると、旅仕度でもするように、身の廻りの雑用品が部屋一杯にひろがっている。
「何をしてるんだい。まさか何処かへ行くんじゃないだろうね」
「行くつもりよ」
「何処へ行くんだい」
「何処だっていいじゃないの。放っといてよ」
「おい寿ちゃん。親不孝もいいかげんにしろよ。可哀そうじゃないかあんなに心配しているのに」
「可哀そうはこっちだよ。好きな男と結婚しちゃいけないなんて、そんな事をいう資格がお父っさんにあるのかい」
と、それも普段からの不満の一つで
「自分は何してるのさ。私と同い年の子と一緒になってる癖に」
「それとこれとは別だ。社長は、自分の事をヒビの入った躰だと諦め、寿坊は綺麗で無疵なんだから寿坊の聟だけはまともな人間を選びたい。その気持は俺にも判るんだ」
「判るでしょうとも、鉄ちゃんだってヒビの入ってる躰だもの」
「そうさ。ヒビが入ってなきゃ寿坊を人に渡しゃしねえよ」
と、思いきっていった。
「そりゃどういう意味？」
「俺だって寿坊は好きだ。こんな躰になってなきゃ、どんな事があったって人に渡すもんか。ヒビが入っちまってるから、仕方なく諦めてたんだけど、バラ公なんかに取られるんだったら、もっと考えりゃよかったんだ」
そういう鉄郎の顔をちらりと見て、散らばっている下

着類を鞄の中へ詰め出した。
「寿坊、まさか、出て行くんじゃないだろうな」
「くさくさするから二三日遊んで来るよ」
「冗談いっちゃいけねえよ。俺は社長から見張りをいいつけられてるんだ。親父さんが承知すりゃアいいが、さもなきゃ出さねえよ」
「おい鉄」
と、寿子の声が荒く変って
「どうしてそんなにバラをいじめるんだい。人間なんてものは、年を取るにつれて幾つにも変って行くんじゃないか。お父っさんだってお前だって、折紙つきのやくざだったのに、正業に就いてまだ六年昔のお父っさんと今のお父っさんとは雲泥の違いだし、お前だって同じだろう。それと同じ事で小松原だって昔のバラじゃない。昔のままのバラならどうして私が打ち込むものか。あの子は横浜生れで、役者になりたくって女剣劇の一座に入って、お京さんに可愛がられたのが運のつきで、厭な噂を立てられてしまったけれど、本当は可哀そうな子なんだよ。何とかして筋の通った苦労をしたいと思い、一座を飛び出してテレビや何かでまごまごしていたけれども、今度やっと時代劇の監督さんに認められて京都の撮影所へ行くことになったんだ」
と、早口で立て続けにいった。生れ変りたいとあせる小松原を説明して
「あの人は、自分の映画が下村商会の小屋へかかるような役者になる。そうすりゃお父っさんだって、六区のバラとは違う目で見てくれるだろう。それまでは仕方がないから我慢してくれっていうんじゃないか。私だって一緒に行きたいのに、あの子の気持がそうならば無理をしないで、時の来るのを待っていようと思ったけれど、お父っさんのあのいい方を聞いていると我慢してるのが厭になった」
と、鉄郎の見ている前でどしどし荷作りをし始めた。

二

鉄郎は何もいえなかった。
「バラはそんな人間になったのかい」
と、いってやると
「一ぺん会ってやっとくれよ。昔が悪いからといって何時までも悪く見ていたら、浮び上る日がないじゃないか。そうだろう。誰だって若い時は間違いもあれば、馬鹿な事もする。よくなろうと努力している事が判ったら、その時には手を取って引き上げて、まともな道の歩

けるように育ててやってこそ人間の情じゃないか。それだのに、只一途に嫌うだけでは一人の男が出来そこなうよ。お父っさんが何といおうと私はバラに惚れたんだから、真直ぐな道の歩けるように骨を折って見る気なんだ。あとでお父っさんにそういっといてくれ。京都まで尾いて行って、脇道へ外れないように見守って、仕事が始まったら帰って来るから。あの人だってやっと出世のとっかかりをつかまえたんだから、陰から、励ましてやりたいんだよ」

と、いい方が整然としている。誰に聞かれても立派なもので、鉄郎も自然と頭がさがり

「そこまで思い込んでいるのなら何にもいう事はない。社長には俺が話すから行って来なさい」

と、そういうより他はなくなってしまった。そして

「俺も長年惚れてたが諦めがついたよ」

と、いい残して下へ降りてしまった。それが夕方の四時頃だった。十二月は四時の声を聞くともう部屋中がうす暗い。かき入れの正月が目の前にあるので、五軒の番組編成や、宣伝プランや、チラシの文案や、立看板の館前装飾や、仕事は山のようにたまっている。夜は夜で五つの小屋をめぐって、その日の上りと、翌日の打ち合せをして歩く。営業部長で宣伝部長で編成係で、小さな会社はこまかい仕事まで一人で片づけなければならない。事務所を出ると通りかかるタクシーを止めた。

小松原に対する寿子の心持も、他人が口をはさむ余地のないような気がする。明日は社長に会い、寿子の希望通りにさせようと思い、五軒の小屋をめぐって田原町へ帰ったのは十時すぎだ。

鉄郎の家は田原町の仏具屋の裏にある。小さなアパートの一人暮しで、通いの婆やが雇ってある。仕事がすむと帰りには艶のバアへ寄って水割を二三杯飲む。仲見世の金田の女中が一本立になって開いた酒場で、古い馴染なので殆んど毎日立ち寄る。

「もうお見えになる時分だと思ってましたよ」

と、マダムのお艶が笑顔で迎えた。何時もより疲れているのは寿子のことがあったからだ。

やっとほっとしたような、名残り惜しいような、バラみたいな奴にあすこまで打ち込んでいるかと思うと、腹も立つ。

最初の一杯を一息に飲んだ。

「いいんですかそんなに荒っぽく」

と、お艶が二杯目を注いでくれる。

「今夜は酔っぱらうかも知れないよ」

「ええどうぞ、鉄ちゃんの酔っぱらった顔なんて見た事

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com